

ヘルタ・ミュラー『心獣』レビュー

光枝初郎（みすてい）

ヘルタ・ミュラーの邦訳は現時点で四つ。処女作の短編集『澱み』（原作一九八四年）、代表作『狙われたキツネ』（一九九二年）、そして三番目の本作が一九九四年で、邦訳の最新作として『息のブランコ』（二〇〇九年）がある。ただ、邦訳が出た順番としては『心獣』が最新作である（邦訳二〇一四年）。ヘルタ・ミュラーは、ルーマニア出身のドイツ語作家である。彼女の地元はもともとドイツのシュヴァーベン地方の人々に入植を受けたのであるが、やはりそういった複雑な歴史の経緯が彼女の作品には大きく影響している。私的には、チェコの地に生まれながらドイツ語で書かねばならなかったフランス・カフカを想起せずにはられない。

そこで、『心獣』の内容であるが、ミュラーのそれまでの『澱み』『狙われたキツネ』の完成度からしても本作は圧倒的に進化している。短編集の『澱み』で、彼女の独特の暗さとニヒルさとを併せ持つ、重厚で繊細な文体が提示されたかと思えば、長編『狙われたキツネ』はその文体の完成度をそのまま長編レヴェルまで引き延ばしたかのような作りになっている。そして『心獣』では、文章はどちらかというと短文の重ねでリズムよくおさまり、代わって複雑な構造になっている物語の要素が強く出ている。

主な登場人物は、女性の「私」とエトガル、クルト、ゲオルクという三人の男性、及びその周辺の人々である。舞台は独裁恐怖政治に自分たちの生活を脅かされるルーマニア地方。反体制派をしょっぴく軍人が街中をうろろしているような状況だ。「私」たちの仲間であったローラという女性が、あるとき自殺するに至るまでが話の四分の一まで語られ、その後ローラの死を不審に思った「私」とエトガル、クルト、ゲオルクの四人が起点となって物語が進行する。この、「エトガル、クルト、ゲオルク」という三人は一貫してまとまって表記される。しかもずっと反復的に、である。読み手に強い印象を与えるようになっていく。「エトガル、クルト、ゲオルクの四角部屋と三人の実家は更に三度搜索された。」「私はエトガル、クルト、ゲオルクと一緒にかなり前から川辺に来ていた。」「エトガル、ゲオルク、そしてクルトにはもうカミソリがなかったのだ。」「このリフレイン的表現はこれのみならず、本作において他に様々な場面で使われている。

エトガル、クルト、ゲオルクの三人の男性それぞれにも別個の結末が与えられるのだが、それにしても彼らと親友である「私」というこの表記もまた曲者である。エトガル、クルト、ゲオルクや他の登場人物は必ず「彼」とか「彼女」とかの三人称代名詞で置き換えられることはないのに、この女性である「私」という一人称代名詞だけが不気味にミュラーの文章の中に漂っている……。まるで、書き手としての「私」（ヘルタ・ミュラーの分身？）と、物語を進行させる人物としての「私」が分裂しているようなのだ。

私は、『心獣』を読んでいて、ある一つのことを気がついた。この物語に出てくる人や、物、あるいは風景などは、それぞれ一度も密接に交わることがないまま、完全に孤絶しているようなのだ。人物どうしが会話していても、たとえばすれ違ったり、まったく意図とは別の答えが返ってきたり、また親密な者どうしの間でも、そこかしこに「どうにもならない距離の埋まらなさ、空虚さ」のようなものが行間を狂おしく支配している。ひとつも会話はかみ合うことなく、寂しく不穏な物語だけがひとりどんだん進行していく。何ひとつ伝達することはなく、風景も人物もそれぞれがそっぽを向いて、重なり合うこともなしにただ併存しているような状態。私はこれを「ねじれ法」と呼びたいと思う。おそらくヘルタ・ミューラーは意識的にか無意識的にか、「ねじれ法」を使うことによって、人々のあいだの——人々と風景のあいだでさえも——まったく届くことのない伝達や交流のその儚さ、虚しさのようなものを極めて独創的に描いているのだ。

『心獣』のなかで出てくる、村の監視組織のピジエレ大尉という存在もまたとてもよく描かれている。ピジエレ大尉はことあるごとに、「私」とエトガル、クルト、ゲオルクとの間の文通を嗅ぎまわっては検閲して無効化したり、「私」らが反体制的な詩を書いたことを問い詰めて「私」に裸になるように命じたりといった悪役ぶりを発揮するのだが、その筆致がとてもよい。ユーモラスな性格も持つが冷徹に軍の仕事をやったのけ、最後にはあっけなく死んでしまう。ピジエレ大尉の「悪」についてもこの作品を語る上で外せないテーマとなるだろう。

とにかく意欲的な小説である。このような小説がいまや日本語でもたくさん読めるようになった翻訳・出版業界には感謝すべきところがある、とつくづく思う。(了)